

天候不良に強い秋まき小麦の作り方

道総研	中央農業試験場	研究部	栽培環境グループ
道総研	十勝農業試験場	研究部	生産環境グループ
道総研	北見農業試験場	研究部	生産環境グループ

1. 成果の概要

- (1) 「きたほなみ」は多肥や起生期重点施肥で栽培すると、日照が少ない登熟条件での減収が大きくなります。
- (2) 起生期ではなく幼穂形成期に追肥すると、群落の受光態勢が向上し、日照が少ない場合でも減収を小さくできます。
- (3) 登熟不良条件では穂数を増やしても製品収量が増加しません。収量・品質の年次変動を小さくするには穂数550~650本/m²を目標に受光態勢を良好に保つことが有効です。

2. 成果内容

日照が少ない登熟条件のとき、それ以前の追肥量を多肥や起生期重点にすると大きく減収します（図1）。

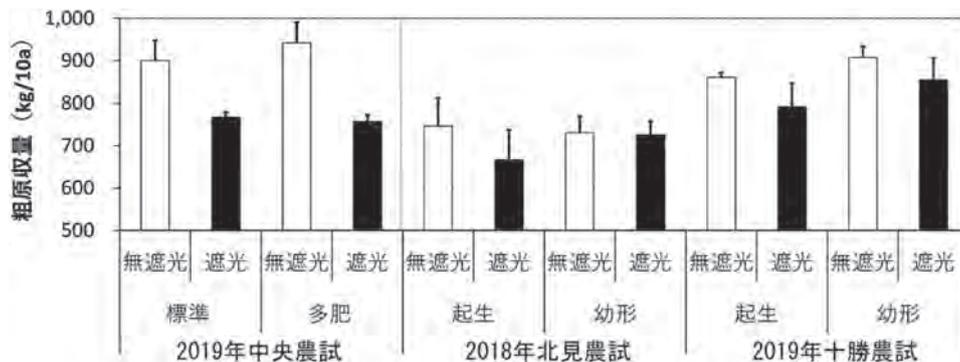


図1 日照が少ない登熟条件での施肥管理と収量

起生期ではなく幼形期に重点的に追肥することで、受光体勢が向上し、群落内が明るくなります。それにより日照が少ない場合でも減収を抑えることができます（図2）。

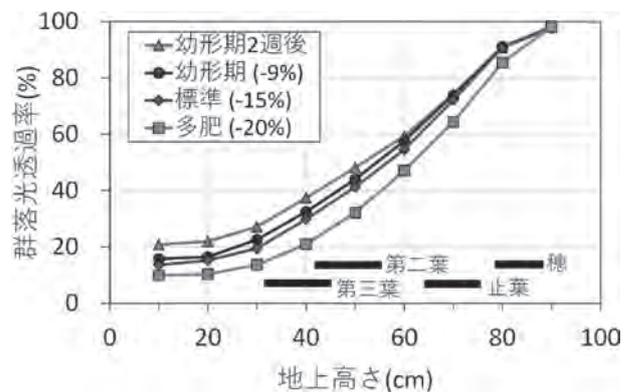


図2 登熟期間中の群落内の光量
(凡例のかっこ内数値は、遮光時の減収率を示す)